

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0843 ◆◆◆

25/06/04

## 【 材料的には「大変動」も期待される 6 月相場 】

先週末に終了した 5 月のドル/円相場、その月間変動幅は 6.53 円(142.12-148.65 円)だった。月間で 11 円以上動いた前月と比較すると半分強の変動にとどまり、良く言えば「比較的落ち着いた 1 カ月」だったと言える。

さて、そんな 5 月相場を受けた足もと 6 月相場の月間見通しについて、恒例となっている過去の経験則をもとに考えてみたい。いわゆるトランプ関税における日米交渉については、決定事項ではないものの「6 月のカナダ G7 にあわせた日米首脳会談がひとつのメドになる」との見方も多く、6 月相場の波乱要因となる危険性を秘めている。しばらくは動意の乏しい動きが続いたとして、それは飽くまで「嵐の前の静けさ」であるのかもしれない。

### ◎カナダ G7、NATO 首脳会議など政治案件に要注意か

まずは恒例となっている月間の星取表から見てみると、過去の 6 月ドル/円相場の勝敗は 1990 年以降昨年までの 35 年間で 21 勝 14 敗だった。

極端に偏っているわけではないが、約 6 割の確率でドル高が有利という結果となっている。また、2020 年以降昨年まで 5 年連続でドル高・円安に振れていることも、気になるポイントかもしれない。足もとを含めたここ最近のドル/円相場を見ると、ややドル安・円高方向が優勢という展開だが、月内どこかで反発へと転じ、最終的には今年もドル高へと振れる可能性を否定できないようだ。

そんな 6 月相場には興味深いポイントが別途 2 つある。うちひとつは、「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえること。

ちなみに、「もっとも動いた」事例のみを以下で挙げれば、1 カ月のあいだに 13 円以上も動いた 1998 年(133.60-146.75 円)になるだろう。先で指摘したように、「月間変動幅 6.53 円で落ち着いた 5 月」の一の反動という側面も踏まえ、いち相場関係者としては今年 6 月相場の大相場を是非とも期待をしたいところだ。

とは言え、もちろん月間を通して逆に「まったく動かない」というケースも少なくない。

比較的最近の事例を挙げても 2018 年の月間変動は 2.21 円、2019 年は同 2.02 円、2021 年は同 1.94 円一となっている。また、昨 2024 年も変動幅は 6.73 円で、それ自体はなかなか大きな変動だったが、年間順位としてはなんと 9 位。そうしたことを勘案すると、2 カ月連続の小動きにとどまる危険性もゼロとは言えず、やや気掛かりなデータと言えよう。

一方、6 月相場におけるもうひとつのポイントは、「6 月相場とその翌月、7 月相場は逆方向に動くことが多い」こと。取り敢えず過去 10 年で 8 回がパターンに合致しているだけでなく、過去に遡ると「勝率」はさらに上昇することがわかっている。

いずれにしても、足もとの 6 月、「ドル高 or ドル安のどちらに動く可能性が高い」という話ではないものの、月の終わりに掛けては来月に向けてのポジションメイクとして、当月と異なる「逆張り」がヒョッとすると望ましいという話になるのかもしれない。

最後に、6 月を「アニバーサリー」の観点、過去の出来事・ニュースなどで見てみると、なかなか興味深いことが幾つかうかがえる。その最たるものは「英国を含めた欧州を中心として、重要な出来事が起こりやすい」ということだろうか。

具体的には「欧州通貨制度・EMSを再調整(1982 年)」、「デンマークでマーストリヒト条約批准を否決(1992 年)」、「フランスに続きオランダも EU 憲法批准せず(2005 年)」、「アイルランドがリスボン条約の国民投票を否決(2008 年)」、「ECB が初のマイナス金利を導入(2015 年)」、「英国が国民投票で EU 離脱を決定(2016 年)」一などとなる。

もちろん、毎年確実に起こるものではないことは承知しているものの、周知のようにウクライナとロシアが停戦に向けて断続的な協議を行っている。2 日に行われた協議では「捕虜交換」で同意したものの、停戦では進展がなかったとされるが、それでも月内にいま一度協議が実施されるもようだ。停戦に向け、なに

